

先進備像玉石雜誌續篇卷第二目錄

細川右京大夫源澄元朝臣像并傳

御相伴衆 義植將軍正覺寺乃難

京都將軍家政事口變 細川政元義高將軍を三

る事 細川上下屋敷乃系 細川澄之

薬師寺與次郎桐乃紋免許 祖納祖約兄弟事

元服擇日 丹波守護職乃高 五十分一

之好氏 山中新左衛門尉俊信 許世子止

細川上屋敷高 義植將軍義澄將軍乃進退

管領代 義澄將軍乃公達 深井合戦

舟岡合戦 越水城合戦

細川澄元朝臣花押

澄元

花押

先進繡像玉石雜誌續篇卷第二目錄終

細川右京大夫源澄元朝臣像

加列藏



信長
印

細川右京大夫源澄元朝臣乃讚岐守義春一ふ之勝乃男
外之管領右京大夫政元朝臣乃養子外里初政元八歳
聰明丸と云し時父管領勝元朝臣十口歳ふく世を早
くせしかの管領職ふは畠山左衛門督政長朝臣を補せら
せし聰明丸を家督を襲く御相伴元乃列ふ加えらせり
長祿以来申次記す之職細川右京大夫勝元朝臣當管
領也斯波左兵衛佐義教朝臣畠山右衛門佐義就御相
伴元乃右衛門督入道宗全細川讚岐守成春一色左
京大夫義直畠山左衛門佐義統佐々木大膳大夫持清
とありし次了國持衆准國持元外様元御供元と次第
せ里然也の御相伴元の國持衆乃上座ふく之職乃下

玉續二ノ一

と知へし

あは聰明丸を始管領彼官乃面々畠山政長を憤る張奉
外里文明十二年聰明丸元服志く細川五郎政元と云同
十七年政元管領不補し右京大夫了任を家乃先途を遂
たせと申但政長去年後之位了叙し柳營伺候乃上首大
外乃之形らき之度還神乃管領先職と云を以く弱年の
當職政元乃た其位了立乃之ふく萬機乃決断多々
政長進退了依里是不於く政元胸中不如何ふ由志く
畠山を瘡し已一人天下を管領せしやと思立と云と申
將軍乃御覺ふけは及大名由小名由其下屬子出表由乃
多く味方了語入趣り人由無く統不年月を過しけふ了

東山政義 常德院將軍家 義熙 隱也させむハ宰相中將
義植朝長相續く征夷大將軍に任せられ斯里一不とハ
舊功乃諸將大敗五噫を歌くく闕を出西施を載く五湖
に傳ゆる昔を慕ひ己々々國々了引籠る族由多うりり
是は世乃轉變乃習心新故時不從く消息を教自然乃勢
とハ云かり々將軍由管領由齡いちく二十不備を逆習睡勤
出頭乃機不遠入戦述懐せし由有令入也然る不政長を
三代乃老臣と云位階乃先進 義植將軍宜下乃由從臣位
に 云云萬心乃傳不振着けたり其頃政長養方乃弟右衛
門佐義就河内國に於く病死也此義就之政長乃養父從
三位持國入道徳本妾腹乃愛子不々寶徳乃末よ里寛正

云續二ノ二

乃終不及之十日五年乃間家督を争ひ初々政長追討乃
御旗を下させし不後不義就征伐乃御教書を成也遂に
政長理運去々今乃繁昌を極むと云共猶昔乃遺恨不深
かり々義就乃嫡子次郎義豊新不父を表ひ悲歎乃涙
不暮く閉籠たる隙を幸ふ義植將軍を勸免を里義豊を
誅戮志く河内國を合せ領せしやと思ふ様々了申せし
ハ明應二年二月二日將軍政長父子管領政元を始之
萬餘騎を引率く河内國に發向す油川郡正覺寺
に御陣を召せ義豊の譽田城を攻む不義豊か孫く政長
政元互り威を争ひ勢を擅不せん之を企る由を知れ
竊不政元不就く父義就存生し不と由既不恩免乃後亦里

綱也。罰多。嗣。及。及。人。と。中。本。文。乃。以。之。普。廣。院。將。軍。家。義。教。
を。犯。し。赤。松。滿。持。子。息。教。康。佐。乃。彦。五。郎。則。尚。等。
小。至。之。御。免。を。蒙。り。以。お。せ。義。豊。い。ま。重。服。乃。内。ふ。く。以。
軍。り。叛。逆。乃。旗。を。飄。し。て。御。敵。と。罷。成。以。へ。之。護。若。の。實。を。
を。糾。明。あ。り。之。無。實。乃。罪。科。を。道。也。懸。命。乃。本。領。を。安。堵。仕。
里。奉。ふ。乃。忠。節。を。顯。し。父。祖。乃。名。を。揚。子。孫。の。眉。目。を。備。以。
せん。様。了。と。徹。し。餘。議。亦。く。歎。き。中。け。道。は。政。元。懇。ふ。是。を。
執。中。之。既。ふ。恩。免。乃。沙。汰。し。及。ふ。處。か。里。ふ。政。長。さ。ら。ふ。是。
を。聽。き。以。將。軍。小。種。々。と。中。志。り。以。義。豊。に。款。訴。空。し。く。お。里。
く。政。元。忽。了。面。目。を。失。ふ。是。不。於。之。政。元。義。豊。一。味。し。く。
政。長。を。討。く。念。問。を。散。せん。此。と。を。謀。り。小。謀。り。也。之。政。

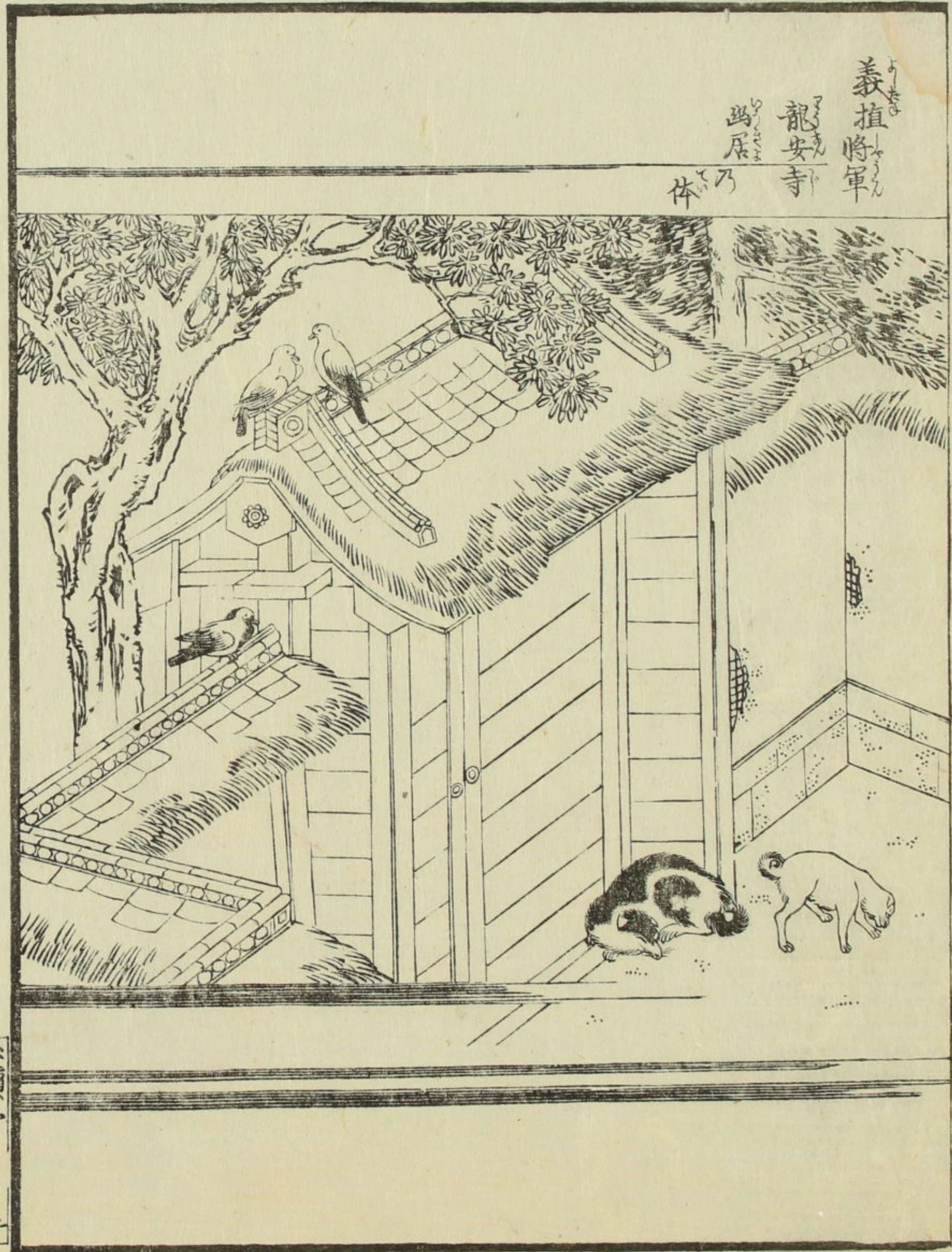
元。を。誅。せ。ら。敷。處。を。中。内。々。政。長。を。仰。合。せ。お。か。ん。と。陣。中。
乃。巷。説。區。々。お。里。け。不。依。政。元。將。軍。乃。御。所。を。襲。ひ。政。長。
了。腹。切。せ。將。軍。を。及。北。山。龍。安。寺。に。押。籠。せ。り。伯。々。下。部。紀。
伊。守。を。警。固。し。參。らせ。通。玄。寺。乃。伯。母。御。前。乃。外。々。參。り。通。
ふ。人。を。禁。大。里。
等。持。院。將。軍。家。尊。氏。元。弘。建。武。乃。擾。亂。を。撥。し。海。濱。鎮。接。
乃。幕。府。を。開。闢。し。七。德。乃。武。威。を。宇。宙。に。耀。し。八。荒。乃。民。
庶。を。塗。炭。に。救。せ。し。よ。り。以。降。寶。篋。院。將。軍。家。義。詮。庶。
苑。院。將。軍。准。三。宮。義。滿。勝。定。院。將。軍。家。義。持。長。得。院。將。軍。
家。義。量。小。至。之。五。代。乃。間。父。子。相。承。之。洪。緒。を。繼。た。ま。へ。ハ。
權。臣。柄。を。握。く。勢。利。を。蓄。ふ。家。系。を。連。あ。り。以。去。八。日。奉。六。公。

一を領せし山名氏清謀叛を起すと云共一日を以て
家之能を以て去る屍を野徑に埋め名を九原に奪つて
筑紫中國赤泉紀伊乃軍勢を發し大内介義弘乃塙の
城に依り逆威を振ひけり二月を保つて至らば
横連糸たを擲并樓反燼とあり後許と云數を以て
多箭戟長刀溝渠不隘之深底不理る是併等持院將軍
家武徳乃餘烈ふくく鹿苑院准后守成乃威嚴を以て
當也故か不盈く長得院將軍家早世あり叶ふ後
勝定院將軍家いよく後嗣を定むる不及とくく鹿御
よりくゆきハ普廣院將軍家義教乃六代將軍乃家督
入備とくせしハ一と畠山元衛門元満家等々秘策を以て

去と云趣し是より大樹乃任徒不慮器を膺し管領乃
推却く推撥乃威を逞くおと蓋漢祚乃衰ふを霍光乃
攝政も包厚く朝儀乃弛むを昭宣乃關白も胎息も自
然乃勢もく止を得以て即是京都將軍家乃政事二變を
る本縁あり満家普廣院將軍家を立ふ勲勞を以て息
寵等倫も超たり去る共謙遜もく身立品乃下階を越
以て息持國孫政長驕奢も生長く位三品乃上階も進
は交道満家を關し其身を亡せし是も普廣院將軍家
諸將乃推拜し就顯密乃學窓を圍奇正乃陣營不入也
叶ふ時年齒既ふ三十五壯心果斷よく豺狼を制し英
膽明察もより秋毫を折たせし獲り等持院將軍家



信光寫



義植將軍
龍安寺
幽居
休乃

玉續二ノ五

草創乃際地を割く勲功乃將研る興入敷惟三軍乃志
を奪く與力乃意を固む家不あり且勉強く新田虎中
將乃郡國を分りて各分る及せんら為ふ也ハ大なるハ
二日國甚しきハ十餘國ヲ躰里小形分中郡を合世郷を
連ね遂る將軍家領京畿を出以僅小臺盤乃供饗を支
ふ家了過を諒る云尾大分也ハ掉り以末大分也ハ必おる
勢か里是を改めく中興乃業を振る終んと志く關東
乃持氏を殲す美濃土岐を討す伊勢乃國司を破る諸
將乃暴戾強悍分者皆震以怖分と云共不慮不赤松
満君乃變ふ係ら勢もハ天壽を殘るをらるくふもハ概
歎了耐以繼嗣之ハ幼冲將軍乃職闕く補せら也所る一

十九箇月了及入 嘉吉元年六月廿四日義教ハ御事
軍宣下其間ハ十九日管領細川右京大夫持之幼を
扱く國讎を討し慶雲院將軍家義勝乃位を定む然分
不持之壽長く以ハ十之歳不く早世也畠山左衛門
督持國代く管領不補を後時由あり慶雲院將軍家
十歳不く薨所す海一乃也ハ持國先將軍乃舎弟ハ八歳
不く之寅君と中々を繼嗣と仰る柳堂了迎入系ら勢
大也共嘉吉三年七月より文安六年四月まで七年乃
間將軍乃宣下かく聞外乃重職を空しく以此際持國及
ハ細川勝元幕府乃機密を柄く猿臂を通關を京都將
軍家政事乃第二變分里三寅君元服乃後八代將軍乃

遺蹟を罷玉入是慈照院將軍東山准后義政乃御事之
唯后幼雅乃間孤弱不座一畠山細川二管領臣救乃力
不頼之齋券乃重を受玉入故了す二管領を控擧せ
ふて能て以終了兩畠山乃闖牆斯波二流乃争亂とあ
里窮く應仁乃擾々京師傾覆不皇是京都將軍家乃
政事第三變形里常德院將軍家義隆應仁亂後乃弊風
を革らんとてを思召立せ玉入鏡志あり里と云と中矢其
齡を縮め其勲績おら以痛惜せし惠林院將軍家義隆
公正覺寺乃難く皇々天綱地常乃頽敗是より皇々
海内禍厄極皇暫く中安寧あるは如く菩提院將軍家
乃法令地を掃く殘滅を京都將軍家は皇々絶た皇

と云と中亦難か

然る不飯何肥後守伯々下部下部と心を合を々勝乃唐
攢乃内了隠一入系らせ龍安寺を盗之出一より北國へ
落しな里其後中國を經く周防乃國へ下向す海一内
介義興り許不御座以政元わ一朝乃怒了君臣乃大義を
忘也將軍を禁籠か一以是と中流石心了安くぬ處あ終
とふや堀越御所政智卿義教二男乃二男の嗟城乃天龍寺乃
香嚴院乃唱食あくおく海をを迎へく元服を加え後六
位下了叙一義遐と中す義高と改めらる明應二年乙
卯征夷大將軍不補一玉入是時征夷大將軍二人すまは
但義高將軍を實父政智卿乃遺命不背く政元ら不片乃

逆状了同意かゝ給ふこと幼弱ふこと事情了疎くすまはし
故と云ふかゝる憂向り里々分正共か
信元云々等持院將
子と仰ぎ奉里々後醍醐天皇乃勅を拒しと政元義植
將軍を逐んためり義高を逐えしと其意全く相同一事
將軍乃傳と政元既不嫉しと思ふ政元を殲し將軍を
廢し自親天下を心乃儘不振舞りた先義高將軍を迎え
川也と云天意人心更し和融せし結句義植將軍を慕ふ
者多く拔々了將軍乃在以此方へ馳参し乃也は義植將軍
を牢々かゝ給へと云御勢を日々了増し加さるる政元方
々都不安堵かすと云と云一味乃軍勢月々了減少去り
憑をいけかく見えはま川一家乃心を取んためり
阿波屋形細川讚岐守義春乃許へ藥師寺與一元一を遣

去り澄元朝臣乃十一歳かゝを養子不定也西家合伴乃
籌策を運されけり
尊卑分脈り細川讚岐守頼春乃嫡男武藏守頼之次男
右京大夫頼元之男左邊將監義春之男阿波守満之と
あり頼元満之を頼之乃子とあり義春乃阿波守護職
を承継り左衛門頼之を管領職とす左京と頼之を
西洞院乃上西大路乃北水落不館作せりさ也ハ上屋
形と号せり詮春乃錦小路乃南堀川乃東不任を依り
下屋形と云也也を細川乃二流と称せり
是より前政元無九條園白准之官政基公乃末子を養ふ
く我知名乃聰明九と称しけり
陰徳平記九條尚短
乃男とあり然也と云

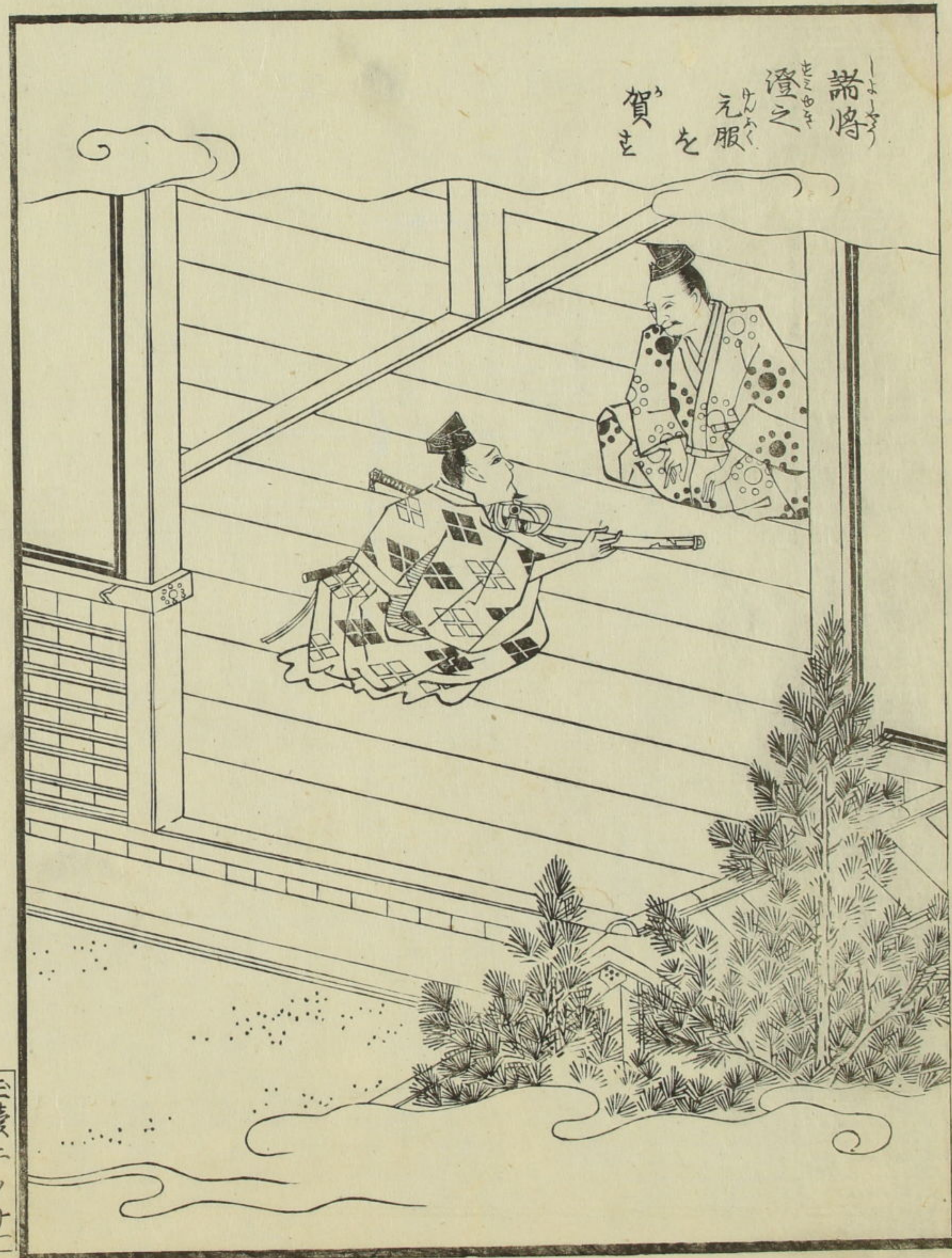
賞し、桐乃紋を免許し、之郎左衛門尉と改め、兄乃遺跡
搦別乃守護代了補せらむけり

或云政元ありて於て賞を失ふへり、初與一澄元朝臣
を立て、己其闕閥乃功勞を誇らんとせむ時、與次郎由
亦比し、是了黨し、其事の成難きを察し、之ハ忽ち兄
を棄て、敵了降る君志あり、兄乃弟から以て、但是我身
乃利を是謀せ、去へ後許し、經て了、之郎左衛門尉
と福井竹田と共了謀叛し、政元を殺し、終て澄元朝
臣を擯、澄元を立とせんと議し、事恠を以て身死名を
史了穢以、晋乃散騎常侍祖納と祖約と兄弟中睦から
と祖納弟乃約と外國士乃形あり、共内心了上を凌く

世あり、抑てあせを便ハ可かり、若其不權を假れば、必
亂階を為んと、中宗元皇帝不奏せしを兄弟相謗と云
く納り官を免させ、去り昔乃積不比ふ、了蓋政元乃
身殺せらむ、家分裂し、子孫威名を損せ、皆自取りと
云、極まりあり

是年十二月十日、聰明内元服とて、細川九郎澄之と名付、丹
波國乃守護職を讓せり

長曆を推し、永正元年十二月十日、了郊日あり、即ち淳
風乃河謂大明日元服吉と云り、協へり、拾芥抄に、了
郊を元服吉日と記せ、然るに、此頃猶日次を擇ひ、風と
知へり、丹波國を、山名隆興守氏清ら分國かりけり



明德二年十二月晦日氏清討死せし後同三年正月に
 日細川右京大夫頼元を以て丹波國乃守護職とあされ
 去より満元持之勝元政元五代相傳乃所帶たり但守
 護職乃所得を丹波一國乃田萬八百五十町拾芥抄此
 稻五百四十二萬五千束を獲魚し其内了就く稻十萬
 零八千五百束此春米五千四百廿石あり今量ふく
 當ふ四斗苞一万石を守護職乃料と以是を鎌倉將軍
 家乃定か里余後京都將軍乃初ふは十萬八千五百束を
 割く武家後と称と太平記了日本國地頭御家人所領ふ
 六是か里五百四十二萬五千束は五十一石五斗五升
 八千五百束か里然也ハ鎌倉乃定免ハ太平記乃武家
 後と稱然を義詮將軍乃時執車尾後入道道朝政く

玉積二ノ十二

廿分一とあ一廿七萬千二百五十束と以此春米一萬三千
 斗を獲魚し今量ふく一萬二千五百一十一石五斗五升
 六合二勺五撮不當四斗苞三萬二千八百七十八苞
 是九郎澄之乃所領大里此廿七萬千二百五十束を
 運上せし餘五百十五萬三千七百八十束あり其内去
 内裏乃御料諸家諸寺社乃分稻を賦せ其餘を國中
 兵士所謂七莊司等乃有か里是當時民了賦を教大畧
 か里國花万葉記小丹波國高丈八万又千七拾石と見
 小元録乃廿八万又千七拾石永正乃廿九万三
 千九百七十七石五斗八合余か里一東五升の定
 小く五百八十七萬九千五百五十一束不當元録乃高
 九町寺殿余二百年許乃間了開けしか里
 澄之乃管領ふ去也と憑此也丹波乃守護職思由依を加
 之在國を盈しと及案乃外ふか里と心中小愠を會む

と云くも為りてかゝり改元を澄之を丹波國へ遣下し永
正二年藥師寺之郎左衛門尉を澄元朝長乃迎の為小阿
波國下差下せし澄元朝長ハ之好筑前守長輝高田與之等
を召具し上洛あり

或云是之好氏柳營乃權を弄し永祿乃大變を醸を濫
觴あり長輝ハ宮内大輔長之一本ヲ式部少輔薙乃長
子あり其祖牒を考人ふ了清和天皇十代加賀美信濃
守遠光乃孫小笠原彈正少弼長經乃長子小笠原左郎
長房文永四年阿波國之好郡乃領主右馬頭盛隆退治
乃恩賞ふ其蹟を賜て皇志より子孫相承る爰に住王
十代小志く長之ふ至れ里或云長房九代義永初之長

之讚岐守義春乃執事とく威權阿波國了並ハか
長輝乃弟を越後守時山城守一秀遠江守時宗と云
永正三年四月廿一日澄元朝長京都へ着たりけふ了香
西又六郎元迎讚岐守護代同孫六藥師寺之郎左衛門尉
と之好筑前守長輝と威を争ふく互に黨を聚め日茂側
り色以香西兄弟かくくハ末憑之形去は澄之を家督と
あし澄元朝長を討ちやと思立嵐山乃鶴峯へ打上り城
墪を構へ洛中を日乃下不見く旗を揚げ色を澄之頼く
久下長澤波々伯部内菟等を討く暖城乃游初軒へ移り
住りけり然ふる若狭乃武田と丹後乃一色と矛指去り
合戦ふ及人由注進ありけり同日九年四月九日改元若狭

へ下向せし武田打負く行方志也以政元勝誇る上洛
を政元弱冠より鬼神幽冥乃事を好む男女乃道を絶く
魔法を業とかり心志荒涼るあり行偏る狂人乃如く喜
怒前かく賞罰常かり志りの家子即後疎る果如何なる
變も有のしと思ひく了打寄く語合れし小福井口郎竹
田孫七薬師寺二郎左衛門等同心志く政元乃逆習者了
戸倉次郎とく右筆乃切表ありけり了。賄賂るまき間を
窺ひ政元を傷害せんと謀りけり了六月廿三日を愛宕
精進おせの索齋乃ため例も湯を浴せけり了。戸倉よき
時節ありと見えゆ。政元湯槽不浸る余念なく其け
り處を只一指り尤も肩より肋骨乃邊まき指貫けり了

志も猛く勇めり政元行年四十二歳入り逆賊乃ため
命を預き波々伯部伯耆守出也を見く道々くと切り掛
りを戸倉さうき以て一々切付く伯耆守り聊先ら其
間了搔幕立去行方を志り了。斯里一後々香西薬師寺一
手不成澄元朝長乃西洞院今小路乃館へ押寄同廿八日
乃曙より里申刻過るまき百々乃橋を北より南へ追責ハ
五辻今小路を横合より駈破り數十合乃戦り香西孫六
奈良修理亮と追ひ返り撃合り孫六遂に討る也は奈良
小痛手餘多處負く引退く澄元朝長かくの叶えしと思
え也乃也ハ二好長輝を具し其夜半許不江列甲賀乃
谷を志し大原越を掾生乃方へ落行ハ香西薬師寺心の

儘小都小打入澄之を立く政元乃葬送を徑常追善乃作
法頗都鄙乃耳目を驚かす法名ハ大心院宗興雲閑山城名
細川系圖を弼く宗貞勳殿了酒不令天と誓稱しけ不爰
龍寺塔頭春林寺乃過去帳了まくやハ
小澄元朝長を甲賀乃山中新左衛門尉俊信を始迎江伴
賀乃兵及ハ細川右馬助政賢澄元朝長乃同民部少輔政
春同淡路守成春を催し八月朔日京都へ攻入る

山中新左衛門尉俊信を井堰左大臣橘諸兄不十口代
乃後胤宮内卿廣仲五代乃孫か里父を重尊と云重尊
乃橘次郎大史宗俊乃次男不叔父之即大史宗兼乃
子乃平新又郎俊直と云り子不成之甲賀郡山中村地
頭を相續せし形也
因云宗俊乃兄を播磨守仲遠と云
仲遠乃次男を宗通と云即三条小

鍛冶

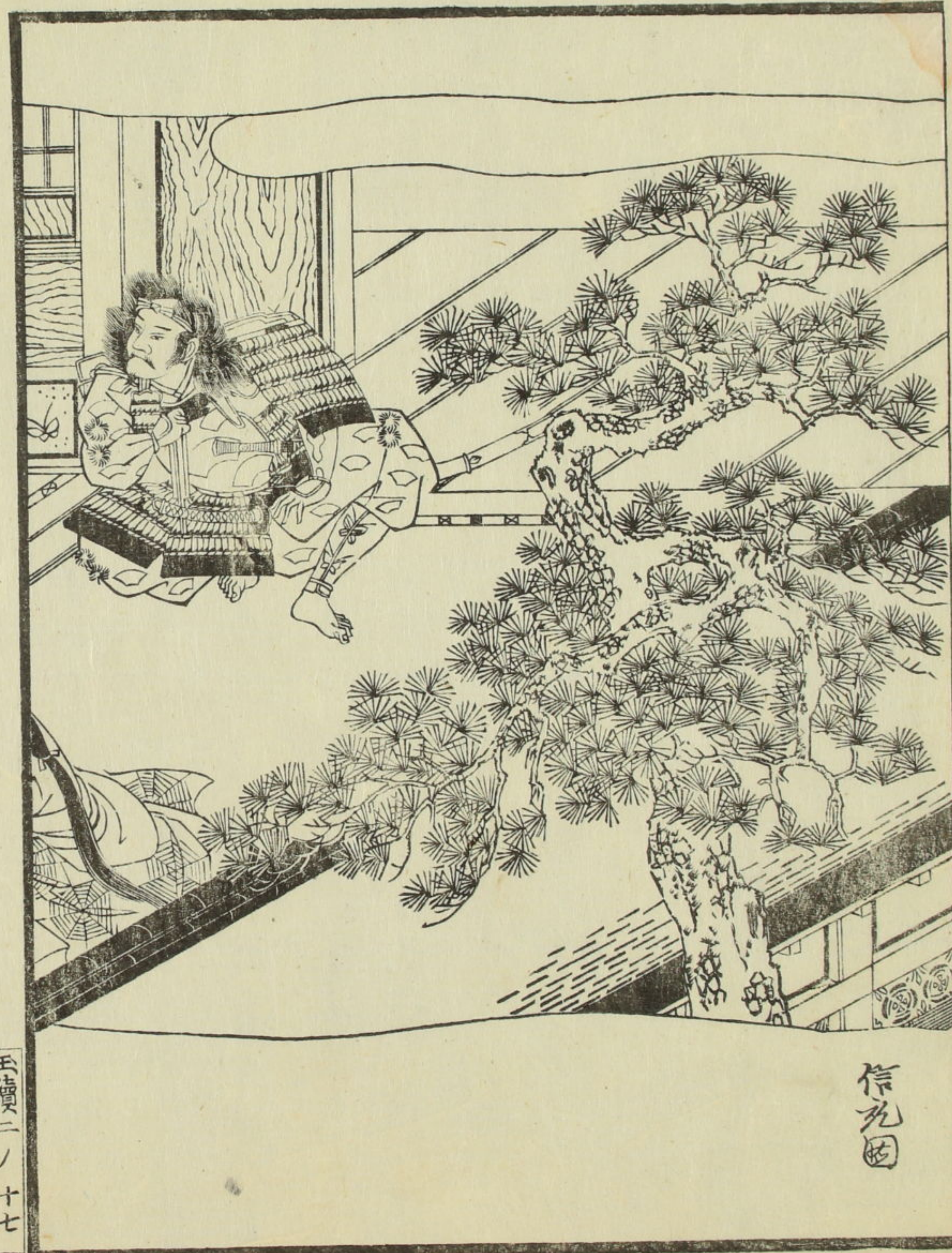
澄之乃嵐山乃游初軒了殘暑乃堪わくを避く何心也
形く居失里け不處へ押寄去らば館乃中無勢不し防
く益々方便也云里け里澄之今を是を擧擧く形以
也其思小程戦ふ尋常不腹を切や名出其惜也命を
答ふと互了勇め勸免ら也我ゆくと打く出火花を散く
之切結ふ中ふ一官兵庫助也大門乃前ふ敵七八騎
を切伏志く其呪也深手數多不負之終ふ去去討れ
み々里番西薬師寺に中を聞城を開い後援乃ためふ
馳下ふ去共館乃内ふく戸倉次郎波々伯部越後守元
則以下生合兵士數を盡し討死し寄手館乃口方より

責入んとせし波々部伯耆守走入る今もや味方
残ら以討死し防くへ兵由なく敵を回方元満大里
道に出へ路由なく雜兵等乃兵仗不懸里見苦敷自
を見玉らんよりの潔く自害志く勇士乃名を揚ら也ん
と夫抄嬢く色と勸免川也澄之心得た里と云由果以
硯料紙を請出く御父准后御母政所を始親く方々へ
父細やかしたるた免く抄乃興る

梓るるるる心よりよ色と引手さく形身と控成ぬる
と一音乃次小鬘乃髪を巻添く色色を付従ひ大里ける
乳母乃局了渡したる傳ふと云聲乃下より押さく脱
雪乃如く膚氷乃様か刀を突立也千入乃紅染返

不處を伯耆守後へ立廻り刀を振上り見也の首
の前了落了け不然後不伯耆守刀取直し胸先了突
貫き同く枕不臥たりし斯る処へ薬師寺香西面振
き切掛不寄手大勢か上り了勝軍志以也は様を靜め
く備を固めたり薬師寺散々不戦人と云共抄るる形不
雜兵乃爲了討也く尸を火堀り川水了流せば番面又云
之香川源太清景了討也けり總く渠等の興力討死百七
十餘人と抄

源九郎澄之永正元年改元乃ふとかり元服志く丹波
守護職を嚴とる思所生乃父母と同く就養忠誠を
竭まへし尤も去抄かくと云養父乃仇大不番西薬師



寺と共に一城を保し、慚とせ、以て戸倉次郎を志し、敵
を拒かせ、猶其力不頼、生を貪ふ不遂、澄之自認
政元を弑せると同し、むろ許乃悼公太子止り進る薬城
飲く幸を大子元来文を弑せざる意あり、自身薬を進
大子不非違と由孔子春秋を作し、許世子止る乃君買
を弑せと記されたり、魯昭公十九年九條准后を一人乃所範
曰海乃儀刑を不其子を孝順了導く能く、惟冠冕
衣裳乃身不加せる乃之長その君を弑せと由刑を致
し能く以當時乃將相それ何を以て任不せしや
澄元朝長是年十に歳政元乃遺跡和泉務津備中讚波河
波等乃守護職了令まゝ澄之乃所務せ、丹波國まゝ合せ

大連を領し、るく、在京大史了任し、管領了補し、る色及
大小事由之好長輝る心乃まゝ了了終ひたり
和泉國國田千百廿六所、務津國田一萬六千八百廿七所
備中國國田一萬八百八十三所、讚波國田一萬七千九百四
十三所、河波國田又千二百四十八所、又國合せ、又萬四
千七百三十三所、又里地獲稻二千七百三十六萬七千東
あふ盈し、此春米百三十六万八千、此を廿分し、一を割
る、百三十六萬八千之百五十五、東あ里此春米六萬八千、
百十七石八斗を全く澄元朝長了收む、分量入る、六萬
四石四斗四升九合七勺八撮、不當る、に斗是、丹波國
苞十六萬八千八百六十一俵、余とある、是、丹波國
台米一萬二千五百六十二石五斗を、加え、今乃十九

萬八千七百二十九俵余乃分限と知へし
孫分り素良修理亮元吉伊丹兵庫助元扶内藤備前守貞
正之好ら權を恣ふと教を候き播津丹波乃兵士を馳催
まゝ澄元朝長を廢し之好を滅り一面々威福を逞くお
さんてを謀りけり大將取くくの叶す誰をか大將お
まへきと案しけり處小細川民部少輔高國防列吉敷館
ふを以義植將軍を都へ歸し入らんとためまづ管領披管
を催促し高國を安房守政春乃ふお里しを改元養子と
去り也共義植將軍を後入り周防へ下向せしよ澄元之
をハ子とあしりるん今年ハ廿四歳去は澄元澄元乃兄ふ
當也分を以し素良伊丹内藏也也究竟乃しとあしりと速子

一味同心し然ハ管領澄元朝長乃館を籠入候しと
雲霞乃大勢梅尾水尾乃峯々小津をとせし義植將軍ハ大
内左京大夫義興島津薩摩守貴久大友修理大夫義長武田
冬郎左衛門尉元繁を照九國二島防長雲伯藝備因播但
作攝丹豫讀まを候き多前小推りたるか程乃者多皆石具志
十五萬餘騎陸を山陰山陽乃兩道海上に兵船八子又百
餘艘乃軍艦を浮し十二月廿八日備後國鞆乃浦小着由江
進攝乃齒を引ら候きお里けは京都入り義澄將軍
管領澄元朝長以乃外小周章し先軍勢乃着到を付らけけ
ふ斯波治部大輔義廉畠山禪心少弐義豊細川兵部大
輔勝久同隱波守成春朝倉彈正左衛門尉貞景赤松下野

守義村富樫介政親一久左京大夫義春伊勢備後守貞
秋庭備中守元重等を先々十萬餘騎之衆御所
馳集於斯處へ義植將軍泉外塘津へ着て入内
是は澄元朝臣坐敵を待て勇氣を不似たり先は
人を割し後々時ハ人ハ制せらるゝと云り逆寄
追崩せとて澄元朝臣を大将とて斯波赤松二好入道喜
雲長輝入道乃月日考ふ外土波遠山乃勢都合八萬餘
騎捕列東生郡中島外津を取
信元云此軍を義植將軍と義澄將軍と乃周旋
澄元朝臣と高國と之各其主乃為不力を竭せし
義植將軍を正統相續乃真主たりと云共政元等不

長なるを為了京師を出て周防了下向あり假令魯乃
昭公公為公果公貴等乃讒を信し季孫意如を伐せ
けふ了季孫乃兵強昭公克之能て以遂て國を指し齊
不往鄆外展乾侯了次玉ふと事相和夫也共彼ハ君長を
伐て克て自孫を他了奔於里是ハ君長を圍君を幽し
不君孫を他了奔於里但魯乃表數世民を舎て政季孫
氏不出夫外故了昭公乃克之能と所ると京都將軍家乃
政ひさし管領より出たるを以て義植將軍の京を出給
金く軌を同しと云共政元乃不長を季孫意如了踰
夫里と云へり
義植將軍とて不塘乃津外着て諸方乃水台をかきけ

家と見え浪速往吉遠里小野了元満去く駭一中島乃諸
大将是を見く案不相違一平場乃合戦叶す如何をい
と隊伍中未定あり以西國勢のちや旗乃手を解貝鐘を鳴
寄東家京勢を一戦ふ及た元澄元朝長と共好と共了口
國をさし落ゆけの斯波赤松を京都へ逃上る

往昔尊氏將軍乃九州乃兵を發し上洛を拒れん
た先捕贈元中將正成卿を兵庫へ下させけ分時正成卿
賊軍を味方了十倍からん懸念乃軍を敵に難からず
要害を依り守る如しとせしを朝廷乃謀臣怯弱也
と云く用ひらば以正成卿戦没一皇風遂に競を休る
ふ至家正成卿を怯弱かふり非を孫子乃十かれ圍之

五か邊の政信をさへ分ち敵をさへ戦ひ少く時守り
若され能避と謀攻篇を説たか不從へか好かへ去へ
中島下向乃諸將乃中不此事を知たか人あらハハハ
怯る軍をかさ留しと不残り多きこと中形り

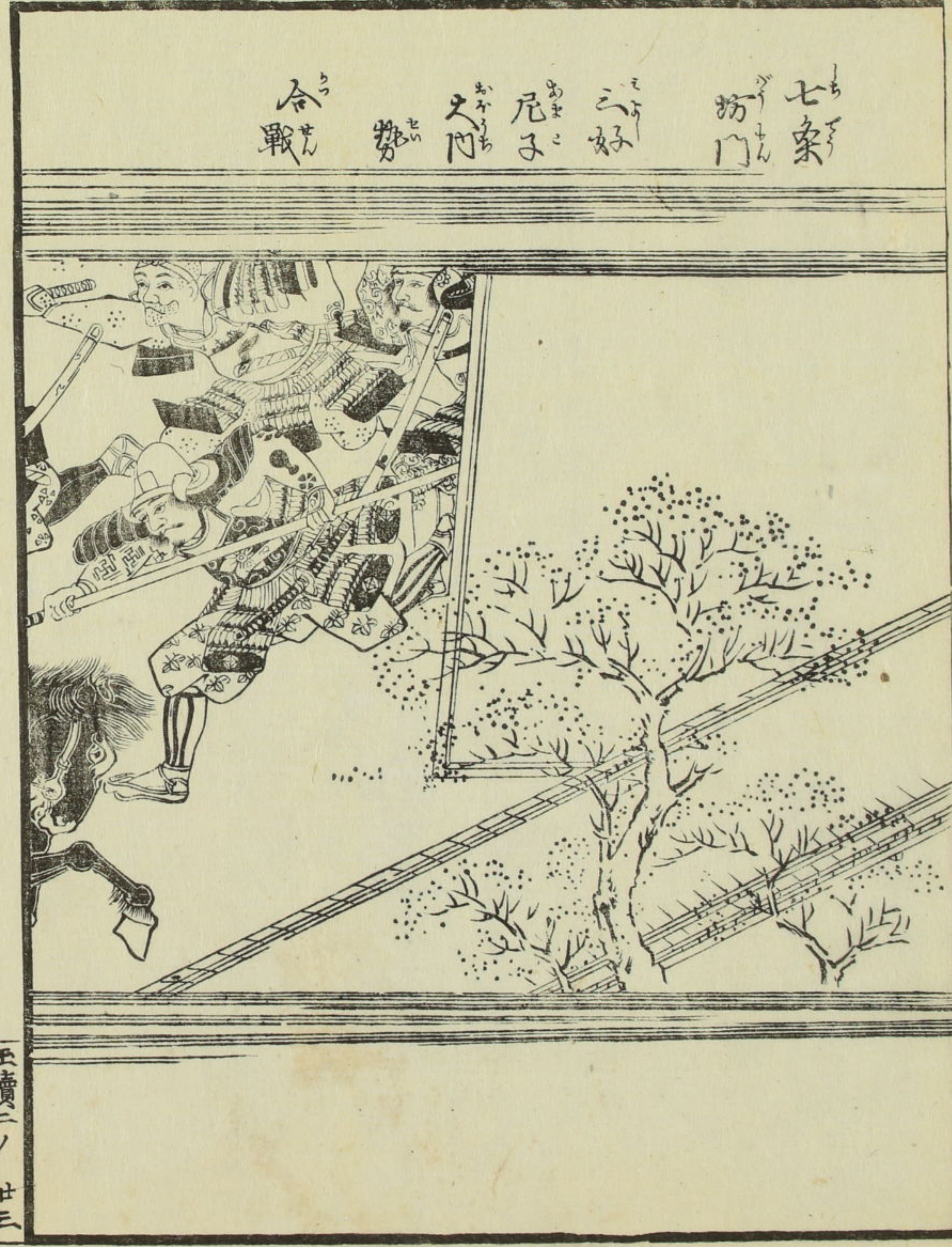
口國中大半義植將軍不從以高國と與力去く澄元朝長
不廉く勢中多しハハ口月初不上洛一義澄將軍乃御所
へ参し不此間を十二萬餘騎と聞えし諸軍勢過すおち
失く僅不殘か兵中降をや乞せん本國へや逃下ら拜と
戦入意考無里けり澄元朝長口月九日西洞院乃籠を自
燒し西坂幸を打越東坂幸より幸傍濱不至里船子五
乘甲賀乃山中へ落ゆハハ好下総守長秀張輝入道希

伊勢國へ落ふ乃り翌朝也ハ十日乃早天々高國入洛志々
見の共細川盛放之澄元朝長兼之り家へ一と思計て
燒拂つて一夜明きん蔭中あり同十六日乃義隆將
軍大原越を杉木谷へと落ふ六月八日義植將軍入洛
中一海一同日冬内ありたり六月廿七日乃所名を義尹
と改らゆり澄元朝長三好長秀伊賀伊勢乃兵士を討之
如景嶽小陣を五路中を眼らみ見下一責了攻取らんと
擬しけふを高國に披管二二萬人六月十七日乃午刻より
據り連々攻上せハ矢軍了ぬを暮し其夜半より
澄元朝長陣を拂ふり引退く七月朔日叙同行も義尹
權大納言了任し征夷大將軍に復任あり翌々色ハ義隆乃

官職位記を停らせ八月朔日之内義興從五位下了叙し
管領代に補せ

管領職之斯波畠山細川之家替々去也小任し將軍十代
尊氏公ハ百七十餘年乃間他家乃競望能く此處
義植卿之ハ好ふ了今夜義興乃勲勞拔羣と云を以て補せらるると
云共猶代字を加えり直小真職と云せ也以義尹卿乃
威推嚴整お教王思給し
代字を所職了附白るに代官
政所代侍所代所司代おと乃
代と同一
子形里

十一月之好孫口郎長光
長輝入道希雲
芥川孫次郎長則
の長光阿波讚岐乃軍兵八千餘騎を駈催し
播磨乃國尼崎
へ押渡里父乃希雲と一手おさ里澄元朝長乃芥川
播磨津島



と郡乃陣へ馳集ふ是を近江國乃六角氏綱及以甲賀乃
者共と謀り合ふ京を攻め東西道壅塞運送糧盡義尹卿
乃十五萬餘騎轍魚乃思ひをかゝ忽ち敗走去く澄元朝
院乃軍一旦に勝利失らん之疑ひかゝると謀る形去共
京方あゝ武田彦吉郎親信乃七千餘騎を白岡了指向
く近江勢を押しさ勢河野口郎通直陶兵衛助持長入道
道麒二萬餘騎あゝ東寺に陣を取大内義興が一萬六
千餘騎あゝ二条大宮神社官乃前へ控へた里尼子經久
ハ又千七百餘騎七条堀川了指向く之好々追手を待た
里之好々今を近江勢日岡山へ指懸川らんと推量里大内
勢あ向く戦を始せば尼子河野横合より打寄關を作ら

之好々敵を之面了受二萬餘騎を之手あ分る命惜ま
以責戦か小敵を日不餘分大勢あ共軍の面々乃持場
を守りし軌を踰以味方を疲れたる小勢との云かりら
今日を限里と振舞ハ尼子大内河野の勢色めき立ち見
えけふ處へ朝倉彈正左衛門尉三千餘騎あゝ之好々陣
乃後より叫くやゝ澄元朝長あを見えたるや味方
乃大事よと面々振る切掛ふ之好々澄元朝長乃手敵
を向くと父子三人一所了打集り打死せんと勢勇ける
實由小路を狭し人数あ多し朝倉念ふく押陣ら結向
澄元朝長あ味方了せり去る軍中世以之好々終了打負は
小路を北へ一線を東へ馳く百萬遍乃淨刹不入自害を

世々やと名入と申敵更ふ慕ハせり一ハ父子之人丹波路
をさしと落約を知人絶くあり里乃里今夜乃軍之好斯
ましく負へさすありね共六角氏綱と申賀る者と先を争
ひ約束乃日を違へけしハ京勢一所集る軍西途不
せさ里一故抄り一之好殿也之行方を去り成一ハ義
澄將軍中澄元朝長申何方へや隱へさしと身を浮萍乃根
を断る流也約へさ便を求らせけり北山乃奥中河と
云立所乃拇尾山乃蔭ふさく人跡絶た地赤乃赤
河縁乃立不任せ去り爰不隱色く坐さ然永正六年の
八月ふ里義澄將軍を迎に國へ落玉ハ六角高頼
を憑之九里崎乃備前守氏遠り許入せ玉ハ澄元朝

臣乃河波國へ押渡里舊好乃族を誅らさ斯く永正ハ
年乃春ふ里義澄將軍ハ江列より播磨國へ移らせられ
赤松義村ら許へ入所ありけり義村新ハ御館作里
く奔走去り里けしハ義澄將軍由今や代り不過を申と申
思食させしと澄元朝長乃許より里御渡里ありへさし
中せ一ハ二歳乃若君を渡り冬らせへさ旨議定あり
澄元朝長御迎り渡海せられ此若君ハ左馬頭義維朝長
五日九里崎ふり誕生後ハ萬松院將軍義晴と申せし
赤里又此地年蓋名乃娘君義澄將軍不仕大里けり
みく奥列へ下向り誕生前ハ七月澄元朝長之好赤松
天海大僧西慈眼大師乃とあり
と共ハ約束しと京都へ責上らんとは國乃軍勢を討率
し纜をとけハ細川右馬助政賢同和泉守山中遠江守先

陣とくく塙乃津入漕家天王寺乃城を貴落橋津國を取
へき根城了せんと謀りけしは塙乃南庄ふ遊佐入道印
斐馳亦た方代深井入陣を張北庄を閉く河内國参田
高屋乃城了まけふ遊佐河内守順盛一万餘騎ふり打
出同月十三日深井ふり合戦し順盛打負遊佐前守香
西福井を始宗後乃兵之百余人討せけしは京都を去
逃上る遊佐入道印斐深井乃軍ふり勝り頓く参田城入
入ハ畠山下後守義英ハ高屋城ハ政賢ハ捨列中島入
陣を取新泉守ハ昭濃ヨリ灘吹飯ハ打揚り東西ハ陣を
張京方ハ河原林對馬守正頼鷹尾城ハ在けしは駈向
く去也を防くと云と也叶入愈くとハ見えたりなり

玉續二ノ廿六

元方高國がと記す然也共澄元朝臣義澄將軍を立ふ
を以て軍の各と高國ハ正統乃義尹卿乃教令を奉り
既む是徳を京方乃守不 同廿六日柳本輝正忠宗雄を
乃子波多野孫九衛門尉及ハ能勢因幡守荒木大藏少輔
等河原林を援えんと灘郷崔松原蘆屋河原 柳本鬼原入
討り出 新泉守り陣乃後を断んと押寄り淡路勢去也を
見く城をや攻ん柳本ふり向んと猶豫けふ處ハ柳本
加勢了力を得り河原林城を閉く打おたり新泉守前後
乃敵ハ相當里火花を散り戦人と云共敵ハ案内者ハ
里味方々地理了疎くしは究竟乃兵士百餘人討せり引
退く播列乃赤松新泉守ハ力を裁せんと賀古川乃宿不
く勢揃り大倉谷 今乃 入り蘆屋川原乃軍敗れぬふ由を

聞探あり入る馳去り八月八日赤松勢兵庫小着新泉守
大木院ひいさ去は河原林を城を攻落せとく同九日乃
宵より押寄息を由繼せ以責し不々同日河原林遂に
城を落し伊丹城入赤松勢を伊丹へ押寄大里京都小
くを澄元朝臣乃先陣既入摂津國小責入河原林を城を
落せ也川と閉るし然ハ由々敷御火事義興向とく叶
ありとく管領京都を打立と山勝入陣を取摂列中島小在
け分細川政賢出也を同後陣乃勢乃續かぬ内了追還せ
とく入江乃一族を駆催し山勝乃陣へ押寄る義興いり小
小無勢入り平場乃合戦叶とと京都を去と引還以同
十六日義興義尹卿を勸免奉里京都を去と丹波國内夜

貞正の館へ入河原の義興京都を去と怯を示し舟岡
乃中を傳大里と云と細川政賢赤松義村等同十七日京
都と入り也共將軍も管領も早落玉と敵一人もあはれ
も如何家敷謀ふやと怪ま色あくと一戦も及とく京都
へ入川敷嬉しき入河原岡山あり備と義澄將軍乃御迎
を参せし去る十日日晷去乃申入と隨從乃諸軍勢鈍色
小黔かえり愁雲峯小掩ひ後日景暗く申々何と云出へき
言葉も形く使節都子故里々色は細川赤松乃諸將力を
落し愁涙も咽け分るかくと止へき入非と義澄將軍乃
御宇合戦了ハ敵を畿外了追散若君を將軍と仰と申ら
及千層乃塔婆を建方部乃法華を讀んよ里も功德遙と

勝不負一と評定一決一々より防戦乃便入と舟岡山
小城を搦へ持指搦指築からへ最嚴重に見えふ乃り
同廿二日義尹卿・高雄山了御陣を召進舟岡討手乃定を
かゝる玉ふ廿四日乃刻入管領義興先陣を奉る
手勢二萬餘騎舟岡乃一城門入向合戦一終小城門を攻
破る一陣破走之隊伍亂之城中防戦乃御盡けし政賢中
為方如く舟岡を落深中を心指く打けふを敵大將と見
く透間由あるを以追懸・誓願寺乃羅漢橋乃よふ討れ
ふけ里・澄元朝長を舟岡乃軍人元如く思え色去る七八
十騎を従へ兵船二三艘入取乗・塙乃北庄入漕渡里軍の
子等を合せんと八月廿三日暮岸あり一かと廿四日了舟

岡落城一々政賢討死せし中閉るけし重く勢を催し
本懐を遂魚一々又阿波國へ漕送し死了永正十六年
揚列乃池田之郎五郎之好入一味義澄將軍乃美若乃九
歳小成玉人を世ふ出さるんと一族を誅ら以有馬郡田
井庄へ打く出旗を奉けし澄元朝長豊島郡を割く池
田了與へ彈正忠小補任せらる是を揚列先手とあり之好希
雲以下一萬餘騎を引率し大物乃浦入押渡里武庫郡神
咒寺を本陣とし川原林正頼を越水城を打圍く責戦
ふ此頃義尹卿を中風乃氣ふ坐し軍國乃政を急ぐ細川
高國乃指揮ありけし十一月廿一日高國京を去る十二月
六日池田了着陣し越水乃後援をか同十七年正月十日

高國乃二萬餘騎と澄元朝長乃一萬餘騎と軍一々阿波
乃兵士切勝々色ハ二月三日城終了破十六日高國京へ逃
上里頓々江列々々々落みたり廿七日澄元朝長乃高國を
追黜一々私乃遺恨了非々阿波乃御所を世了立冬せん
ろ為お里と中一とを之好希雲を使々々言上あり三月
十六日澄元朝長神光寺より伊丹城へ後里京都乃左右
を待せけふハ五月朔日之好希雲澄元朝長ハ代里義尹卿
ハ御禮中々々明る二日東ハ如京去々々簞を焼々二二萬
餘騎り復押寄たり是々高國江列勢を率一之好を撃ん
と謀るお里同日午刻等持寺乃東南へ合戦了初ハ
希雲切勝と云共讚波乃香行安富久米河村心愛去て三

好を射ふ希雲終ハ戦負々曇華院へ逃入一と注進々々
ハ同七日澄元朝長伊丹城を出生瀬口を公々々落終々河
原林ハ頼泉列塘々々色を別早船ハ乗々追駈面山振
ま切掛色ハ澄元朝長散々ハ并負辛々々播列ハ渡里裏
よ里様ハ色々阿波乃國ハ渡ら建々々後ハと形々六月十
日終了病了罹里々失ら建々行年廿七歳法名々安英道
辨々宗泰一々本々道真乗院と云嗟々天龍寺寶光院ハ細
尚乃關基般々永正年中真乘院成ハ二十歳と云
或云齊桓久内寵多々丈人乃如々者六人桓公卒一々
五公子立一とを争ハ桓公乃尸棺ハ納る一と般々林上ハ
生一六十七日戸乃蟲戸よ里出失里と云里政元ハ妻

妾を儲と志く義子三人あり各家督を争ひ遂に政元
身殺せらば義子三人互に干戈を動かし相傷害を
細川乃家終に二流とあり餘波振ると以茅土保とあり
不到る然らば継嗣を立ふに慎まゆふを願ふや

先進繡像玉不雜誌續編卷第二終

